

碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集
がんばる商店街

66

2009 July



特集 **がんばる商店街**

東京大学大学院教授 大西 隆

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていく媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

きらめきの地域デザイン
碧い風
あおいかぜ

66
2009 July

contents

- 3 **視点** 商店街再生に必要な都市戦略とまちづくり 東京大学大学院教授 大西 隆
- 4 人と街と商業が有機的につながる魅力的な商店街 松本大地
- 7 妖怪たちが迎える商店街 《鳥取県境港市水木しげるロード》
- 8 人にやさしい商店街づくりでにぎわいを創出 《鳥根県松江市天神町商店街》
- 10 コミュニティ施設を拠点に連携を強化 《岡山市奉還町商店街》
- 11 市民と一緒に楽しむ商店街 《広島県呉市》
- 12 観光ミックス型商店街に再生 《山口県萩市田町商店街》
- 14 土地の所有と使用の分離で商店街を再生 《香川県高松市丸亀町商店街》
- 15 商店街の個性さがしから生まれた「昭和の町」 《大分県豊後高田市》

- 15 新連載「若者たちの地域づくり」① 若者とシニアで農業の活性化をサポートする学生耕作隊 《山口市》
- 16 「地域に生きる企業家群像」⑥⑥ 株式会社ミック 社長 宮脇和秀 《鳥根県松江市》
- 20 「産学官連携最前線」⑨ 植物由来の素材で地球環境に大きく貢献するバイオプラスチック 《広島県》
- 22 「キラリ、輝く元気企業」③③ 「人を守る」を企業理念に事業領域を拡大するハツタ山口 《山口県周南市》
- 24 「夢紡人／ゆめつむぎびと」⑥② 地域創生のリーダー育成を目指し私塾を開いた 松畑照一さん 《岡山市》
- 27 「佳味彩々」⑪ どんごろけ飯 《鳥取県東中部》
- 28 新連載「藩ものがたり」① 津和野藩 《鳥根県津和野町》
- 30 「庭園逍遥」⑪ 小川氏庭園 《鳥根県江津市》
- 32 新連載「国宝の旅」① 吉備津神社本殿・拝殿 《岡山市》



表紙写真：「岡山市奉還町商店街」写真：林田悟（岡山市在住）
目次写真提供：協同組合松江天神町商店街、豊後高田市観光まちづくり（株）、マツダ（株）
表紙デザイン：久原 大樹（広島市在住）

*本誌は再生紙を使用しています。

特集 **がんばる商店街**

視点 **商店街再生に必要な都市戦略とまちづくり**

東京大学大学院教授 大西 隆

大都市を除くと、全国のほとんどの商店街は衰退している。一九八〇年代から大型店舗が相次いで郊外に立地し、中心市街地を中心とした既存商店街は大きな打撃を受けた。その後、二〇〇〇（平成十二）年には地方都市の中心市街地の衰退・空洞化に対応するため

に「まちづくり三法（大規模小売店舗立地法、中心市街地活性化法、改正都市計画法の総称）」が制定され、二〇〇六（平成十八）年には中心市街地活性化法と都市計画法が改正された。その効果が表れるのはこれからであるが、郊外の大型店舗によって中心市街地の商店街が脅かされているのが実情である。たしかに中心市街地の商店街の再生は重要なテーマであるが、そこで必要なのはこれからの都市の姿を明確にしなが

ら再生に取り組みという「都市戦略」である。

中心市街地の商店街といっても、都市によって大きな差がある。都市全体の消費額の五〇％以上を占める商店街もあれば、都市の拡散によって数％にまで縮小した商店街もある。したがって、何が何でも中心市街地の商店街の再生に取り組みではなく、それぞれの都市における商店街の役割・機能を見定めることが必要だ。大きな役割を果たしている商店街であれば再生は重要なテーマとなってくるが、役割が小さくなっている商店街であれば拡散した商店街とリンクさせていくという戦略も考えられる。

また、市民が中心市街地に何を期待しているかも考えることが必要である。



中心市街地活性化の目的は商業だけでなく、文化やアミューズメントなど多様である。したがって、商業だけで再生するのはではなく、他の機能を充実させることでにぎわいを創出し、商店街の活性化を実現することも考えるべきだ。

例えば、新潟県長岡市では駅前の商店街を再生するために、駅前に市役所を移転し、イベントホールにもなる「本庁舎」を中心に、周辺の空きビルに別庁舎を分散させ、職員が庁舎を行き来することでにぎわいを創出しようとしている。また、若手県盛岡市では、商店街に赤ちゃんプレイルームを備えた喫茶店を設置し、子育て中のお母さんたちが集えるようにする試みが行われた。これらは直接商業活動に結びつくものではないが、中心市街地の機能をよみがえらせる上では大きな役割を

果たしている。また、商店街を再生するためには、個々の商店だけではおのずと限界がある。そこで求められるのが、商店街を一つの「商店」として組織化し、明確なビジョンを持って商店街そのものを「経営」することだ。それを担うのが「まちづくり会社」である。

空き店舗や空き地に見られるように、商店街においては土地の所有と利用も大きな課題である。その点においても、まちづくり会社が商店街の活性化を進めることで、土地の所有者が安心して土地や店舗を貸せる仕組みを構築することも可能である。土地の所有者にも商店街の活性化に参加してもらい、土地の所有と利用の協力を実現することも商店街は新しいにぎわいを創出できるといえる。

人と街と商業が有機的につながる 魅力的な商店街

松本大地

疲弊にあえぐ日本の商店街を再生するためには、まず「商店街のマインド」づくりが必要である。と同時に、人が集い、街がにぎわい、商業が潤う好循環を成立させる「仕組みづくり」に取り組むことが求められている。



人気が高まっている東京・谷中の商店街（写真：阿部章仁）

商店街の意識も 変化してきた

世界第二位の経済大国である日本の商店街が悲鳴を上げている。中小都市のほとんどの商店街が年々衰退し、深刻な状況を迎えているのだ。

そうした状況の中で商店街の意識も変化している。中小企業庁は二〇〇三（平成十五）年に全国の商店街を対象に「商店街が抱える問題」についてアンケート調査を行った。実は、一九九〇（平成二）年にも同様のアンケート調査を行っているのだが、その結果を比較すると商店街の問題意識の変化を読み取れる。

一九九〇年の調査では、「駐車場がない」や「大規模小売店舗に客足移動」といった外部要因が上位を占めていた。それに対して、二〇〇三年の調査では「後継者難」や「魅力ある店舗が少ない」といった内部要因が上位に挙げられている。十三年の間に商店街の意識は「商店街VS大規模小売店舗」の対立軸による量的競争から、「生活者に支持され、時代提案ができるか」の質的競争に変化しているのだ。これは、顧客視点に立った姿勢でなければ販売は成り立たないことを、商店街も意識してきたことを示している。

させることでモノ（商品、技術、サービスなど）や「ト」やり方、仕組みなど）、「ロ」（企業文化、社風など）が明快になる。

まず、商店街を何度も歩き、店舗を視察して会話を重ねた結果、商店街全体のドメインを「人と環境に優しい小さな感動の散歩道」とした。そこには、単なるモノの売り買いの場ではなく、来街者に優しく、地球環境を守り、いつも小さなふれあいや微笑がある地域「コミュニティ」の場にしたいという思いが込められている。

商店街全体のドメインに続いて、各商店は家族や従業員たちと一緒に自分たちのドメインを考えた。鮮魚店は「地域の安心と健康、そしておいしい暮らし」、お茶店は「享保十三年から日本の「ヨロ」茶文化を発信しています」といったように、お店のポリシーを分かりやすく表現したのである。

生活者に日常の楽しさを 提供する商店街

さらに、小さな感動の散歩道をつくるために、商店街全体で取り組む最大事項を「四季のイベント」とし、商店街が変わったことをプレゼンテーションする機会とした。限られた予算の中で最大の効果を生み出すために、地域共生

不足している 顧客視点の時代対応力

その一方で、商業環境は大きく変化しており、とりわけ業態開発は急速に進んでいる。昭和三十年代までの日本の業態は、百貨店や訪問販売、小さな小売店、昭和三十年代になって誕生したスーパーマーケットなどわずかであった。しかし、現在ではコンビニエンスストアやアウトレット、大型ショッピングセンター、特定分野での豊富な品ぞろえと圧倒的な低価格を特徴とするカテゴリーキラー、さらにはインターネットでのeコマースなど多くの業態がある。

それに伴って、生活者のショッピングにおける選択肢も著しく拡大している。したがって、生活者への時代対応ができなくなつた商店や百貨店、スーパーマーケットなどは次から次に市場からの退出を余儀なくされる。とりわけ、旧態依然とした商店街の多くが累積したさまざまな問題解決の糸口を見出せずにいるのが実情である。

それは生活者にとっては、「商店街に本当に欲しい商品・サービスがない」

ということであり、商店街にとっては顧客視点に立った時代対応力、魅力ある売り場の創造が不足していることを示している。マーケティングとは「生活者一人ひとりが欲していること、困っていることを推測し理解することで、それを満足させてあげるためにはどうすればいいかを考えること」である。それならば、商店街は再度顧客の信頼を得るきめ細かい時代対応が急務であろう。

再生には「商店街のマインド」 づくりが不可欠

商店街を根本的に再生するためには内科的な治療と外科的な治療が必要である。これまでは歩道のカラー舗装やアーケードの設置といった外科的な治療が重視されてきたが、これから重要となってくるのは内科的な治療、特に「商店街のマインド」である。どのような「哲学」で商店街づくりを進めるのか。そこからスタートしない限り、商店街が抱える問題の根本的な解決にはならない。生活者の感性が高まり、「ヨロ」の豊かさを求める時代になってきた現在、商店街のマインドはぜひあるべきかを考える

ことが急務になっているのだ。

商店街のマインドを考える上で、一つのヒントとなるのが神奈川県小田原市のダイヤ街商店会の取り組みである。人口約二十万人の小田原市には三十九の商店会がある。商店数は約二千六百店であるが、ピーク時（一九八八年）に比べると二〇％も減少している。

ダイヤ街商店会は駅から徒歩五分の立地であるが、年々売り上げは減少し、にぎわいも低下するなど危機感が高まっていた。そうした中で再生に取り組むことになったのだが、最初に始めたことは「ドメインづくり」であった。ドメインとは自社の目指す事業領域、存在意義、提供価値のこと、それをほきり



日常の楽しさを提供する小田原市のダイヤ商店街（写真提供：商い創造研究所）

参加型のイベント内容とし、企画からパ
ンフレットの作成、会場設営などもすべ
て商店会の会員で行った。自らが動くこ
とで、やりがいだけでなく結束力も生
まれてきた。

第一回目となる昨年八月は小田原の
ダイヤ街とハワイの「ダイヤモンド」
を引掛けて「ダイヤ街モンドヘッド祭り」
とし、生演奏やフラダンスなどハワイアン
フェスタで商店街を染め上げた。

また、十二月八日に開催した冬のイベ
ントは、ピートルズのジョン・レノンの命
日でもあることからテーマを「クリスマ
スマーケット&ピートルズワールド」と
し、多数の音楽グループが商店街に集
結し、ピートルズのヒット曲ばかりを演
奏した。普段はなかなか聴くことがで
きないハイオリンやゴスペルの演奏もあ
り、街中に小さな感動を呼び起こした。

さらに、メイン会場や街路のワゴンに
は各商店の自慢の逸品が並べられ、あ
ふれんばかりのお客さまは普段とは一味
違った買い物を楽しんだ。と同時に、乱
雑な駐輪場と化していた広場をシーズン
イベントでは「楽しむサロン」とするこ
とで、商店街をぶらりと歩きながら「モ
ノ」と「場」と「時間」を楽しむとい
う生活者の意識も高まってきた。

成熟化した生活者の価値観にどう応
えるか。商店街の苦境から抜け出すに

は何かが必要か。それは、もう一度原点
に戻り、地域住民の日常の幸せに通じ
るような存在になることだ。ダイヤ街の
シーズンイベントもそのきっかけづくり
に他ならない。

地域で実現する 人と街と商業の好循環

商店街のメインストリートとともに、新
しい仕組みづくりも必要である。その
一例が米国オレゴン州ポートランドのま
ちづくりへの取り組みである。ポータラ



いつも多くの市民でにぎわうポートランドのファーマーズマーケット（写真提供：商い創造研究所）

ンドは人口約五十七万人の都市で、豊
かな自然と都市性が調和した「環境共
生都市」として脚光を浴びており、そ
の暮らしやすさから人口が毎週五百人
増加しているともいわれている。

ポートランドでは中心市街地を一つの
ショッピングタウンととらえた施策が展
開されている。例えば、再開発では歴
史性のある古い建物を保全し活用して
いるが、中心部のビルはすべて道路に面
する部分の五〇%以上を商業もしくは
シヨールムにして界隈性を保ち、情緒
ある外観を残した店舗や住居が新しい
時代感覚を発信している。

また、ソフト面では「グリーン・アン
ド・セーフ」制度が街の治安や美化を



駐車場ビルに入居しているポートランドのティファニー（写真提供：商い創造研究所）

向上させている。ホームレスや刑期を終
えた軽犯罪者が社会復帰として清掃に
従事し、リタイアした警察官や警備員
などが街のパートタイムや観光案内を担っ
ている。この運営には商工会議所が携わ
っており、資金は街がにぎわうことで潤
うデベロパーがテナント料の一部を回し
て負担している。

このようにポートランドでは、官と民
が協働することで、人が集い、街がに
ぎわい、商業が潤うという好循環が成
立しているのだ。

自己実現欲が充足されると、自分の
住む街の社会環境への関心は高まって
いく。疲弊にあえぐ日本の商店街におい
て、人と街と商業が有機的につながる
魅力的な次世代モデルづくりがスタート
することを期待したい。

profile

松本大地 まつもと・だいち

1952年生まれ。株式会社商い創造研究所代表取締
役。1988年に株式会社丹青社に入社後、商業施設
などのプロデュースを担当し、数々のショッピングセ
ンターや駅ビル等のコンサルティング、研究活動に携わる。
2007年に商い創造研究所を設立し、全国のまちづく
りや商業施設のコンサルティングなどを行っている。

特集 | がんばる商店街

妖怪たちが迎える商店街

妖怪のブロンズ像で にぎわいを創出

子どもたちから大人まで幅広い人気
を博している「ゲゲゲの鬼太郎」の作
者は水木しげる氏である。水木氏の出
身地である鳥取県境港市には妖怪のブ
ロンズ像が並ぶ水木しげるロードが設置
され、観光客を迎えている。その数は
百三十四体。等身大のものから手首ほ

どの小さなものまで大きさはさまざま
ある。また、約八百メートルの水木し
げるロードに沿った商店では、お店ごと
の商品に加えて「鬼太郎グッズ」が並べ
られ、観光客たちは笑顔で買い物を楽し
んでいる。

水木しげるロード設置のきっかけとな
ったのは一九八九（平成元）年からスタ
ートした「緑と文化のまちづくり」で
ある。当時の商店街は大型小売店の進

出やモーターゼーションの進展
などにより寂れていた。商店
街を活性化したい。その方
策を模索する中で生まれたの
が、地元出身者である水木
氏のマンガに登場する妖怪の
オブジェ・モユメントなどを
歩道に設置し、親しみのあ
る快適な道として整備する
という構想だった。水木氏の
協力も得られ、一九九一（平
成四）年には最初のブロンズ
像が設置された。

その後も境港市は毎年度ブ
ロンズ像を設置し、二〇〇三

《鳥取県境港市水木しげるロード》

（平成十五）年三月には八十六体にま
で増加した。それとともに、マンコミな
どで紹介されたこともあって水木しげる
ロードを訪れる観光客も増加し、二〇
〇三年には八十五万人を超えるほどに
なった。

しかし、市の財政が厳しくなる中で
これ以上市の予算で設置することは難
しくなった。そこで、二〇〇四（平成
十六）年に境港市観光協会や水木しげ
るロード振興会などは妖怪ブロンズ像設
置委員会を設立し、ブロンズ像百体を
目標に設置のスポンサーを全国から公募
した。その結果、わずか一月で目標
を達成し、その後ブロンズ像が設置され
た。水木しげるロード振興会は地元の
商店街で構成される会で、一九九八（平
成十）年に設立以降、市や観光協会な
どと連携しながらロードのにぎわいつく
りに取り組んでいる組織だ。

ソフト面でも

さまざまな施策を展開

ブロンズ像の設置とともに、水木しげ
るロードではソフト面でもさまざまな施

策を展開している。その中でも、商店
街のにぎわいつくりで大きな力となっ
ているのが妖怪スタンプラリーだ。

これは水木しげるロード振興会と観
光協会が一緒に行っているもので、一冊
百円の「妖怪ガイドブック」を購入し、
お店の前に設置してある三十七個の妖
怪スタンプを押すものである。すべての
スタンプを押すと、「完走証」がもらえ、
残念ながら「完走」できなくても二十
個以上を押していると、「のん氣にくら
しなさい」という水木氏のメッセージが
入ったシールがもらえる。

さらに、今年の四月からは、水木氏
が元々紙芝居の原作を書いていたことか
ら、日曜日と祝日を中心に水木氏の人
生を劇画風にまとめた紙芝居も行って
いる。また、来街者にゆくり楽しんで
もらうためにトイレを開放するお店も
登場した。

来年三月末からは、水木しげる氏の
奥さんである武良布枝さんをモデルとし
た朝の連続ドラマがスタートする。地元
では観光客のさらなる増加を期待する
とともに、訪れる人たちに満足して
もらうための「仕掛け」づくりに取り組
もうとしている。来街者の満足度を高
め続けようという水木しげるロードの取
り組みはさらに本格化している。



買い物客を迎える妖怪のぬいぐるみ（写真提供：境港市観光協会、協力 / ©水木プロ）

人にやさしい商店街づくりで にぎわいを創出

《島根県松江市天神町商店街》

高齢者にやさしい 商店街をつくらう

二〇〇七（平成十九）年に開府四百年を迎えた島根県松江市ではさまざまなイベントが繰り広げられている。松江城を築城した堀尾吉晴は築城にあたりて宍道湖畔の白瀧に天満宮を奉遷した。それが白瀧天満宮で、今でも学問の神様として親しまれている。その白瀧天満宮から松江城に向かう道筋が天神町商店街だ。

開府当初から門前町として栄え、「松江の銀座」とも呼ばれていた天神町商店街も、昭和四十年代からのモータリゼーションの進展と大型店の郊外進出によつて衰退してきた。そうした中で、

江市から「意外な話」が持ちかけられた。商店街のある白瀧地区を全国に先駆けて、高齢者が住みよいモデル地区にしたいというのだ。一九九九（平成十一）年のことだった。

「それまでは若者が集う商店街ばかり言っていたのが、突然高齢者ですからね

最初は驚きましたが、さっそく地元の若い人たちに声を掛けました。すでにお店を閉めている人もいましたが、地元には愛着があり、やってみようということになったのです」

こう語るのは協同組合松江天神商店街の中村寿男理事長で



多くの人でにぎわう、毎月25日の天神様の縁日

地元の大学が 商店街の活動に注目した

こうした天神町商店街の活動に思わぬ反応があった。地元の島根大学から高齢化社会を研究したいので、商店街の活動に参加させて欲しいという申し出が寄せられたのだ。

こうして二〇〇〇（平成十二）年にはチャレンジショップとして、大学生が商店街で販売を体験する「おかげ庵」がオープンした。おかげ庵は二〇〇四（平成十六）年には、「島根大学白瀧サロン」へと衣替えし、現在は地元の人たちと一緒に地域の歴史などを学ぶ「研究拠点」として機能している。

島根大学との交流が深まると、児童生徒の体験学習をしたいという申し出が小中学校からあった。それを受け入



毎日多くの高齢者がお参りする「おかげ天神」

ある。こうして商店街と行政、商工会議所の三位一体となった活動が開始された。

市・商工会議所・商店街の 三位一体の活動

まず行っただのは、市民病院が近いこともあって日中は高齢者が多いため、二軒の空き店舗を高齢者が集まりやすい施設（たまり場）に改装することだった。それがふれあいラザ「天神まめな館」と交流館「いづく亭」である。同時に、管理運営は連合町内会や商店街、公民館などで構成する運営協議会が行うこととした。この施設では、いつも高齢者のボランティアが必ず留守番をし、いつでも話し相手や湯茶の接待ができるようになっている。

その一方で、商店街は高齢者に親しまれる商店街を模索し、その一環として東京・巣鴨のとげぬき地蔵も視察した。そこで得たのは、高齢者にとっては買い物よりもお参りが大切であるとい

目指すのはすべての人に やさしい商店街

天神町商店街が次のステップを迎えたのは二〇〇五（平成十七）年のことである。松江市福祉課の障害者福祉担当から商店街に障がい者のお店を出させてほしいという申し出があったのだ。市内の福祉施設では障がい者たちがさまざまな商品を生産しているが、天神町商店街の活動を見聞きする中で、そこで販売したいという障がい者たちの声が高まってきたのだ。

こうして誕生したのが授産施設「まるべりー松江」である。ここではパンやクッキーなどの製造販売とともに、自然食のレストランも運営しており、それまで食堂がなかった商店街の新しい魅力となつていく。

また、商店街を中心とした「輪」を拡大するとともに、天神町商店街はできる限り負担を抑制しながらリアフリーにも積極的に取り組んでいった。その代表的な例が歩道と車道との段差の解消である。通常段差を解消するためには歩道を低くするが、それではお店の入り口との段差が生じ、商店の資金負担も高くなってしまう。そこで道路（県道）をかかさ上げすることで段差を解消した。



高齢者のボランティアが留守番をしている「天神まめな館」

と同時に、独自の工法で無電柱化も実現した。通常電柱をなくすには電線を地中化するが、それでは商店の資金負担は増えるし、工事期間も長くなる。そこで、軒下に鉄製のボックスを設置し、その中に電線や電話線を通したのである。

こうした天神町商店街の取り組みは中心商店街を再生する新しい取り組みとして全国的に注目されている。「スタートは高齢者にやさしい商店街でしたが、現在はすべての人にやさしい商店街を目指しています」と、中村理事長。

昔から地元の人たちに親しまれてきた天神町商店街は、そこに関わる人たちの輪を広げながら、より多くの人たちに愛される商店街に発展しようとしている。



高齢者の商店街に「進出」してきた大学生たち

コミュニティ施設を拠点に 連携を強化

《岡山市奉還町商店街》

拠点として

コミュニティ施設を建設

コンベンション施設のママカリアフォーラムやNHKなどが同居する高層ビルなどで街の様相が大きく変わりつつあるJR岡山駅西口。その近くにあるのが奉還町商店街だ。

奉還町商店街はもともと山陽道の一部であったが、廃藩置県により失職した池田藩の武士が大政奉還により手にした奉還金を元手に店を起したことに



生活感があふれる奉還町商店街 写真：林田悟

が商店街の始まりであった。その後も奉還金を手にした武士たちが次々に移住し、世にも珍しい土族ばかりの商店街となった。その後、価格が安くかつ庶民的な商店街として栄え、特に第二次世界大戦後は近くに県庁が一時移転したこともあって、夜遅くまで人通りが絶えることはなかった。

しかし、一九五七（昭和三十二）年に県庁が岡山城の近くに移転すると、繁栄ぶりにかげりが見え始め、さらに大型店進出などによって大きな打撃を受けた。

昔ながらの商店が苦戦を強いられる中で、奉還町商店街振興組合はにぎわいを取り戻そうと、街路のカラー舗装やアーチの設置などを行ってきた。その二環として一九九八（平成十）年にはコミュニティ

施設「りぶら」の建設に着手した。

「当時はイベントを開催したくてもスペースがありませんでした。そこで、廃業した婦人服店を振興組合で買い取り、そこを地元住民が立ち寄りやすいオープンスペースにしようと考えたのです。」

こう語るのには商店街振興組合の岸卓志理事長である。ちなみに「りぶら」(LUBULA)は英語の自由・国際性・美しさ・都市性・生活文化・快適性の頭文字を引用したものである。

翌年にオープンした「りぶら」は四階建てで、一階はギャラリー、二階から四階は集会所となっている。集会所は会議や書道などのカルチャー教室に使われており、利用料金が二時間で二千元といったこともあって月平均百二十回以上は利用されている。特に、学生やボランティア団体は無料となっているため、専門学校生による市民向けパソコン教室なども開かれている。

「私たちも学生と一緒に事業を展開したいと考えてきましたから、非常に良い拠点になっています。若者たちが商店街に集まることにより刺激を得ることができ、斬新な発想によるイベントなども生まれてきます」と、岸理事長は若者との連携の成果を高く評価している。

地域を挙げた

ストリートイベント

「学生との連携もそうですが、商店街をステージとしたイベントを連続して開催することで多くの人たちとの交流を図り、それによってにぎわいを創出したいと考えています」と、岸理事長。自分で作成したイベント案にはぎゅしりと企画が並んでいる。その戦略は、商店街を地元の人たちや若者たちの活動の拠点、発表の場として利用してもらうことで商店街を盛り上げようというものだ。

その取り組みの一つが「奉還町アート商店街」である。これは、若手の作家たちの作品を商店街の店舗に展示し、多くの人たちに街を散策しながら芸術作品を楽しんでもらおうというものだ。生活感あふれる商店街とアートの融合は話題を集め、期間中には多くの人が足を運んだ。

「商店街は一本の道ですが、これからは周辺の飲食店なども連携して面的な広がりを実現していきたいと思います」と、岸理事長は展望を語った。

かつて土族の店が並んでいた商店街は、地元の人だけでなく若者や外国人も集まる空間に変ぼうすることで地域に活力をもたらそうとしている。

市民と一緒に楽しむ商店街

タウンマネージャー

派遣事業を活用

「大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）」「や」てこのくじら館（海上自衛隊呉史料館）」などに多くの観光客が訪れている広島県呉市。それととも、商店街を中心とした新しいまちづくりとして注目されているのが呉市中央区六商店街の取り組みだ。

通の六商店街で構成され、二〇〇五（平成十七）年度から独立行政法人中小企業基盤整備機構のタウンマネージャー派遣事業を活用した商店街の活性化に取り組んでいる。

最初に就任したタウンマネージャーは「商店街は買い物をする場所であるだけでなく楽しい場所」をコンセプトとしたコトクなイベントで話題を呼んだ。

例えば、ウエディングパレード事業や呉カルタ事業などである。いずれも市民参加型のイベントで、とにかく参加して楽しいことを目指した。

現在のタウンマネージャーも「市民参加型」であること、誰もが参加しやすい小ぶりのイベントを続けている点では変わっていない。これは、活動方針が「継続は力なり」を合言葉にしているからだ。「大きな催し物をひとつづつとやるよりも、小さなものを」ツツと積み重ねていきたい」と、NPO法人タウンマネジメントくれの横山尚佳理事長は語る。

今年ゴールデンウィーク中には十四回目を迎えた写生大会を開催し、市

コツコツと努力するのみ

呉市中央区六商店街の現実には厳しい。「百年に一度」といわれる不況のありを受けてシャッターを閉める店も出て、現在は百五十店舗にまで減少した。

市の助成制度やNPO法人タウンマネジメントくれのサポート体制などにより毎年五店舗ぐらいの新規出店はあるものの、店舗総数は目減りしている。イベント開催などの活動を継続的に進めてもいるが、それで一気に効果が上がるといっわけではない。

それでもコツコツと努力を続けていくのは、何よりお客さまとの関係を大切にしているからだ。昔ながらの店とお客さまとのきずなを大切にしている限り、お客さまが去っていくことはないと思じているからだという。

「ここまでがんばったのだから、もう少し辛抱しよう」「あと三年もたてば、きっと景気も良くなる」「昔ながらの商店街が見直されるときが来るんじゃないか」とみんなで声を掛け合い、目先の効果よりも数年後の未来に期待をかける。 (文・藤沢享乃・広島市在住)



ゴールデンウィーク中に開催された写生大会 (写真提供：NPO法人タウンマネジメントくれ)

観光ミックス型商店街に再生

地元の人も 観光客も楽しめる商店街

明治維新胎動の地として知られる山口県萩市の中心市街地にあるのが田町商店街である。江戸時代、田町商店街は萩往還の出発点であるとともに、城下のメインストリートでもあった。萩往還は参勤交代での御成道おなりみちとして開かれ



商店街の入り口にある「萩おみやげ博物館」

たもので、幕末には維新の志士たちが往来し、歴史的にも重要な役割を果たした。

田町商店街の歴史は古く、江戸時代には通りに沿って連続する商店街が形成され、多くの人が行き交い、さまざまな商品が集積していたという。現在のアーケードの裏側に残っている伝統的な建物はその面影を現代に伝えている。

しかし、一九九八（平成十）年頃から商店街に空き店舗が目立つようになり、このままでは商店街は生き残れない。そう考えた商店街は萩商工会議所や萩市観光協会などと一緒に「まちづくり委員会」を設立し、商店街再生の道を模索した。

「そこで考えたのが、観光客も地元の人と一緒に買物が楽しめる『観光ミックス型商店街』への移行です」。こう語るのは萩市田町商店街振興組合連合会の山下成一理事しげいちである。

萩市には外国人も含めて多くの観光客が訪れているが、田町商店街を散策することはほとんどなかった。その一方で、観光の中心が地元の人々との交流

《山口県萩市田町商店街》

に移行しており、歩いて楽しい商店街も観光の大きな魅力となってくると考えたのだ。

組合員有志で スーパー跡地を購入

そうした時に地元のスーパーが閉店することになった。そこで商店街の組合員の有志十名は有限会社じーるファクトリー萩を設立し、スーパーの敷地を買収した。二〇〇二（平成十四）年のことだ。

ちなみに社名の「じーる」とは英語で「熱意」を意味する言葉である。

そして、観光客の誘客を図るために市に廉価で譲渡し、市は用地を広げて二〇〇六（平成十八）年には大型バスも駐車できる無料の市営駐車場を整備した。

「これがまちづくりの始まりでした。その後、閉店した地元の百貨店の空き地を購入しました。その時に構想したのは食料品などを販売する市場の開設だったのですが、とても本業の傍らでできる事業ではありません。そこで、地

元の業務スーパーと相談して移転してもらいました」と、山下理事は語る。

さらに、二〇〇五（平成十七）年には、商店街の正面入り口に空き店舗が発生したため、そこに「萩おみやげ博物館」を設置した。これは、市内で製造されている商品のみを扱うショップで、地元メーカー約八十社の協力を得て萩の特産品を販売している。

こうしたじーるファクトリー萩の活動を契機に新しい動きも生まれてきた。地元のホテルなどは株式会社御成道を設立し、空き地を購入して市場やレストランを開店するなど、商店街を生かした事業を展開するようになったのだ。

「これからは小さな店でもいいから事業にチャレンジしたいという人は増えてくると思います。そうした自立する気概を持った意欲的な人たちも支援しながら、この商店街に活気を取り戻したいと思います」と、山下理事は力強く抱負を語った。

何もなければ空き地だらけになる。そうした危機感こそが田町商店街の再生アクションの源泉である。その再生に向けた商店街の人々の熱意は、観光客や地元の人たちとの交流を得ながら着実に広がるつとじている。

土地の所有と使用の分離で 商店街を再生

土地問題の解決なくして 再生なし

高速道路の休日千円乗り放題で利用者が倍増した、岡山県と香川県を結ぶ本州四国連絡橋瀬戸中央自動車道が開通したのは一九八八（昭和六十三）年である。連絡船の沈没で多くの修学旅行生が死亡する悲惨な事故もあり、本州と四国を結ぶ橋は四国の人たちにとって長年の悲願であった。

その一方で、架橋によって地元の商業が大きな打撃を受けると危惧する人たちもいた。四国の商都といわれる香川県高松市の中心部にある高松丸亀町商店街振興組合である。ノウハウや資金力で圧倒的に優位な本州の大手資本が出店すれば、地元の商店街は壊滅状態になると考えたのだ。それが、現在全国から注目されている丸亀町商店街の再開事業の始まりである。一九八四（昭和五十九）年のことだ。

「大手資本に対抗する仕組みをどう作

り上げるか。それを考えていくと、土地問題の解決がなければ再生はできないという結論にたつたのです」。こう語るのは高松丸亀町商店街振興組合の古川康造理事こうぞうである。

土地を投資し、 地代という配当を得る

こうして生まれたのが土地の所有権と使用権の分離である。多くの商店街の場合、空き店舗や空き地にならなくても、土地の所有者はそのままである。まちづくりのためには、セッターバックなどで所有者に辛抱ばかりを強いることはできない。

所有権と使用権の分離は、土地の所有を変えずにビルや床をまちづくり会社が取得・運営するもので、地権者はそれぞれの土地を所有し続け、まちづくり会社と定期借地権契約を結んで土地を貸し出

す。一方、まちづくり会社は建物を所有・運営し、得られた家賃収入から建物の管理コストなど必要な経費を除いた分を地権者に分配する。地権者は事業に土地を投資し、地代という形で配当を得るものだ。

この分離を実現するために、振興組合は何度も会議を開催し、綿密な収支計画や資金計画などを策定して、すべての地権者の合意を得た。「コミュニティ」を崩壊させないでいかに商店街を再生するかを最重要課題にしました。そのためにも全員合意は大前提でした。この商店街は四百年以上の歴史を持ち、現在でもしっかりと「コミュニティ」が形成されています。だから、全員合意も実現できたのだと思います」と、古川理事長は語る。



多くの人でにぎわう丸亀町商店街 写真：林田悟

居住者の回帰を目指して テナントミックス

再開発の第一弾として二〇〇六（平成十八）年十二月に竣工したのがA街区である。ここでは、イベントホールや市民広場、マンション、レストランなどが街に導入された。一般的な再開発ではまずキーテナントの確保が最優先課題であるが、振興組合はむしろにぎわいの創出を最優先した。にぎわいがあればテナントは出店してくると考えたのだ。

また、急減した居住者の回帰を実現するため、まちづくり会社はマンションなどを整備するとともに、必要なテナントを合理的に配置していった。まちづくり会社が業種の偏りを是正し、商店街全体のテナントミックス（業種混合支援）を行うことで商店や施設を適材適所に配置することが可能となったのだ。

高松市は二〇〇七（平成十九）年に「にぎわいと回遊性」をコンセプトとした中心市街地活性化基本計画を策定している。その計画においても丸亀町商店街の再開発はリーディングプロジェクトとして大きな役割を果たしている。「みんなの街を、街のみんなでつくる」を合言葉とした丸亀町の再開発は民間主導型の商店街再生として着実に成果を生み出している。



人間力の形成で日本一の技術集団を目指す

株式会社ミツコ 社長
宮脇和秀 《島根県松江市》

社員が自ら制作した 「生きた二十年史」

創立二十周年を記念して制作されたDVDのタイトルには「オール・オーバー・アゲイン（原点に帰る）」という言葉が記されている。収録されている約二十分間の映像を見ていて、私は思わずHKKのドキュメンタリー番組「プロジェクトX」を思い浮かべた。「プロジェクトX」は、日本の経済成長を支えてきた団塊の世代の多くがテレビの前で涙したともいわれる作品で、常に高い視聴率を誇っていた。

と同時に、この会社の二十年はまさに「戦いの二十年」であり、社員一人ひとりが自己変革を達成する道のりでもあったことを知らされた。ナレーターも、会社の歩みを淡々と語るのではなく、社員の生の声を入れることで社史を「生きた二十年史」にしている。そこからは、創立からの二十年で会社がどれだけ成長したかを示すのではなく、一人ひとりの社員が仕事を通じてどれだけ変革していったかを伝えたいという制作者の思いが伝わってくる。

その意味で、このDVDは会社と社員にとってまさに「プロジェクトX」なのだ。「実は、このDVDを制作したのは社員のグループで、毎日終業後に集まって遅く

まで作業していました。もちろん会社としても支援しましたが、それ以上に社員の熱意が制作を支えたといえます。昔の写真はありませんかと言われて、私も古い写真を探したりしましたよ」

こう話ると企業家は笑い声を上げながら、再び映像に目をやった。おそらく何十回も見ているのであるが、その瞳はまるで初めてのように輝いていた。島根県松江市の株式会社ミツコの宮脇和秀社長（60歳）である。

世界を夢見て 外資系メーカーに就職

宮脇社長は一九四九（昭和二十四）年に、世界遺産の石見銀山がある島根県大田^{おおた}市で生まれた。父親は県庁の職員であったが、松江市に単身赴任しており、毎週土曜日の夜に家族のもとに帰っていた。

「日曜日の午後二時ごろになると、家族みんなで母親がいれてくれたお茶を飲んでいました。本当にささやかな家族だらんの時間でしたが、今でもほっとさせてくれる思い出となっています」

中学校を卒業すると松江市の高校に進学した。姉妹がいるだけの男一人だったため、甘えてしまうのは良くないと、父親の住む所に下宿することになったのだ。

高校を卒業するまでの三年間、宮脇社長は父親と共同生活を送った。父親は毎日遅くに帰宅していたが、毎朝弁当を作ってくれた。おかずは、タマネギのみじん切りをいためたものと卵巻きが多かったという。四十年以上前のおかずまで記憶しているということは、それだけ印象深い三年間だったのだろう。

高校を卒業すると、東京の大学に進学し経済学を学んだ。大田、松江、東京と、成長とともに宮脇社長の視野も拡大していったが、次のステージとして夢見たのは世界、とりわけ米国だった。

その夢を実現するために、宮脇社長は大学を卒業すると複写機等の外資系メーカーである富士ゼロックス株式会社に入社した。一九七二（昭和四十六）年のことだ。富士ゼロックスでは、英語が得意なため米国を中心とした業務を担当した。その後、国内を担当するようにになり、一九八三（昭和五十八）年には神戸支店長に就任した。

「ほぼ八年間は日本と米国を往復し、フィリピンや韓国に現地法人を設立するなど、仕事は面白かったですね」

そんな宮脇社長に大田市の実家からある知らせが届いたのは、神戸支店長に就任してからほぼ二年後だった。父親がガンで、余命わずかという知らせだった。宮脇社長は悩んだ。仕事は面白いし、

profile

宮脇和秀 みやわき・かずひで

1949年島根県大田市生まれ。大学を卒業後、富士ゼロックス株式会社に入社し、海外事業部、神戸支店長を経て、85年に株式会社ミツコに入社。代表取締役専務を経て、97年に社長に就任。島根経済同友会の代表幹事を務めるなど、地域活性化にも努めている。ミツコは、資本金4,500万円、従業員数約120名、売上高51億円である。

文：城市 創（島根県益田市出身） 写真：古川誠（島根県斐川町在住）



常にグローバルな視野でビジネスを展開する宮脇社長

帰りたくないという気持ちも強かった。それでも島根県に帰ることを決意した。毎朝弁当を作ってくれた父親の存在感が宮脇社長を突き動かしたのだ。

若い社員が生きがいを持てる企業文化

島根県に帰ると、宮脇社長は設立されたばかりの株式会社ミックを任せられた。ミックは富士ゼロックスが地域販社として地元資本と一緒に設立した会社であったが、設立直後とこのこともあって業績は苦戦していた。

たかも知れませんが、私にはそんな気持ちはまったくありませんでした。ただマーケットを分析し選択と集中で事業を展開するといったビジネスの原則が確立されておらず、そこから立て直すことを考えました。

宮脇社長がまず戦略として掲げたのは島根県を貫く国道九号線のベルト地帯を押さえることだった。それも徹底した現場主義で、社員にはまずお客さまにアタックすることを指示した。しかし、成果はなかなか上がってこなかった。それでも宮脇社長は叱咤激励の言葉を発し続けた。その当時はDVDの社史は「戦場だった」と表現している。やがて戦場から戦果の報告が相次ぐようになった。それとともに社員も少しずつ

自信を持つてきた。

「苦しい時、社員から社名を島根ゼロックスにして欲しいという声が上がりました。社名にゼロックスというブランドが入っていればもっと売れると考えたのでしよう。しかし、私の返事はノーでした。大樹に寄りすぎるのではなく、常に新しいことに挑戦する。そうした会社を目指すためには、可能性を秘めたミックという社名が適切だからです。」

一年半後に社員アンケートを行ったところ、ほとんどの人が「ミックが良い」と答えた。

この間、宮脇社長が常に考え続けたのは社員が生きがいを持って働くにはどうすれば良いかということだった。とりわけミックの社員には若い人が多い。まだしっかりした人生観を持っていない若者だからこそ、仕事を通じて生きがいを見出し、欲しいと考えたのである。

そのために必要なのは、自由な雰囲気、若い人たちの思いが生かされ、社員一人ひとりがやりがいを持てる企業風土、企業文化をつくることだった。それは企業の活性化にもつながる。かつて勤めていた富士ゼロックスは大企業でありながら、明るく、自由で、動きがあり、しかもスマートという企業風土があった。宮脇社長はそうした企業風土を地方都市にあるミックでつくりたいと考えたのだ。

地域が良くなる限り企業も成長できない

宮脇社長は二〇〇三（平成十五）年に島根経済同友会の代表幹事に就任した。それだけでなく同会社の経営で多忙であるのに、あえて快諾したのは地域社会を良くしたいという思いからだ。『孟子は「恒産なきものは恒心なし」と説いていますが、地域経済と地域社会は一体のもので、地域社会が良くなる限り限り、企業も成長できません。そのため、経済同友会も地域のの人たちに言葉だけでなく形で示していくことが必要だと思えます。』

経済同友会の使命をこう語りながら、宮脇社長はその役割を「接着剤」と表現した。さまざまなモザイクをつなぎ、それが一つの形になると自然に見えるようになる接着剤である。そこからは「形式」ではなく、「実」にこだわる企業家の理念が感じられる。

「今回の世界同時不況は日本の企業に重要な選択を迫っていると思います。この嵐で世界は大きく変わろうとしています。これまでのように身を屈めて嵐が通過するのを待つのではなく、視界が悪くても勇気を持って前進することが必要です。」

ミックの本社は松江市郊外



若い人たちの活気が満ちているオフィス

「社史のDVDもミック・デジタル・ハリウッドという社員のグループが制作したものです。このグループもインターネットでの表現を先駆的に研究しようと考えて設立したもので、研究内容などについてはメンバーに一任しています。『自由の中に規律を、規律の中に自由を』という言葉がありますが、自由と規律のバランスをとりながら社員の力を伸ばしていくのが経営者の仕事だと思います。」

技術に価値があればお客さまはやってくる

こうして培われた先駆性は着実に成果を生み出している。その一つが二〇〇

六（平成十八）年の株式会社MCセキュリティの設立だ。MCセキュリティは韓国の「ナンド」コーポレーションと合併で設立したもので、ネットワーク社会を迎えて不可欠となっているネットワークセキュリティのデバイスやソフトの開発から販売までを業務としている。ナンドコーポレーションはサイバーテロを防御する専門企業として世界的にも高く評価されている。そのナンドコーポレーションと合併で企業を設立し、本日も松江市に設置したというところは、ナンドコーポレーションがミックに高い信頼を寄せていることに他ならない。

このようにミックは国際的にも高く評価される技術力を着実に構築している。それはまさに、社員の人間力を高めることで、日本一の技術集団を形成しているともいえる。

「よく東京に支社を設置しないのですかと聞かれますが、設置する考えはありません。なぜなら、しっかりした技術力、体制、人脈などのコアな価値があればお客さまは来てくれます。草木もなびくがごとく東京・大都市に出かけるのではなく、逆に地方に来ていただける仕組みをつくらねば、地方は衰退の二途です。それはこれからの地方のビジネスモデルともいえます。」

資格の取得でモチベーションを高める

社員が生きがいを持つために宮脇社長がまず行ったのは資格取得の励行だった。創立当初の中心的な業務は複写機の販売であったが、デジタル化の進展に伴って複写機の機能も多様化し、通信などのデジタル化などにも対応する専門性が求められるようになった。

とりわけ島根県という小さな市場で事業を展開するためには他社の一歩先を目指すことが不可欠である。そこで資格を取得することで、会社全体の技術力を高めようとしたのだ。

「資格を取得するために、毎日業務が終わってから講習を受けるのですから、社員にはつらかったと思います。しかし、資格に挑戦することで社員一人ひとりのモチベーションは高まりますし、資格を取得することで仕事はもっと楽しくなり、さらにモチベーションが高まってくる。そうした好循環が生まれてきました。」

ミックの事業領域は「誰もがすぐに理解できる世界」ではない。むしろ「理解するのが難しい世界」である。だからこそ、資格を取得することで仕事を「面白い世界」に転換させたのだ。その一方で、新しい事業に挑戦したいという社員には積極的に起業させるとともに、資金



ミックが入居するビル。玄関からすぐにデスクに向かえるように、創業以来、常に1階にオフィスを構えている。

のソフトビジネスパーク島根にある。この企業団地には研究開発型企業が数多く立地しており、東京から移転した企業の研究開発部門も入居している。その本社ビルのテラスから宍道湖畔の市街地を眺める宮脇社長。その視野には、約四十年前の大学時代と同じように世界が広がっているようだ。

植物由来の素材で 地球環境に大きく貢献する バイオプラスチック

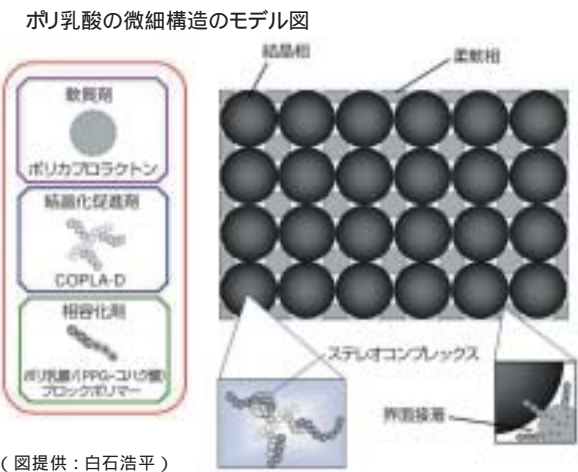
〔広島県〕



バイオプラスチックの内装部品を装備したマツダ車（写真提供：マツダ）

現代の生活や産業に不可欠なプラスチックを植物由来にすることで、地球環境に貢献しようという産学官の取り組みは、自動車内装部品の製造を実現することでも、「100%植物由来を目指して、さらなる研究を続けている」。

することが考えられるが、お互いの樹脂に混ざり合う（相溶化）ものでなければ衝撃の緩和作用は期待できない。「そこで着目したのが樹脂の構造です。これまでは混ぜることを前提に研究していたのですが、あえて混ぜられないものを添加し、お互いの界面を結ぶことで衝撃を緩和しようとしたのです。そこで、軟質剤と相溶化剤を併用し、多数のポリ乳酸結晶の周りを柔軟相で強固になくという樹脂構造にして、耐熱性を確保しつつ耐衝撃性を改善することにしました」と、白石教授は説明する。ポリ乳酸結晶と柔軟相が界面で接すること、硬くて衝撃にも強いプラスチックに改質できたのである。こうして開発したバイオプラスチックは



（図提供：白石浩平）

世界的に注目される バイオプラスチック

「CT機や携帯電話のボディ、自動車内装部品などに使われるプラスチックは現代の生活や産業に不可欠である。その一方で大きな課題もある。プラスチックのほとんどは石油からできているため焼却すると地球温暖化の原因となる二酸化炭素を排出するのだ。」

そこで世界的に注目されているのがトウモロコシやサトウキビなどの植物から作られたバイオプラスチック「ポリ乳酸」である。ポリ乳酸の開発はすでに数多く行われているが、バイオマス由来成分が低いままのものも多く、しかも製品化するためには耐熱性や耐衝撃性など多くの課題がある。

そうした中で、二〇〇四（平成十六）年には広島県で産学官連携によるプロジェクト「ポリ乳酸射出成形による自動車モジュール部品の新規開発」がスタートした。これはポリ乳酸の改質材料を自動車内装部品に実用化しようというもので、経済産業省の「地域新生コンソーシアム研究開発事業（二〇〇四年度～二〇〇六年度）」にも認定され、マツダ株式会社や広島大学、西川ゴム工業株式

が終了した後、引き続き西川ゴム工業と連携して共同研究をスタートさせました」と、白石教授は新しいプロジェクトの目標を語った。

西川ゴム工業との共同研究をスタートさせる時に着目したのが天然ゴムであった。日常生活で使っている輪ゴムなど身の周りには天然ゴムも数多く使われている。特に、ゴム製品の開発に取り組んでいる西川ゴム工業にとって、環境を考えると天然ゴムに着目するのは必然的であった。その天然ゴムを軟質剤に使用すれば100%植物由来にできると考えたのだ。問題はポリ乳酸結晶と天然ゴムの界面がしっかりとつながるかどうかがあった。天然ゴムを使うと、相溶化剤との相互作用はこれまでに比べて低下してしまう。そこで、天然ゴムを改質したものを一部配合することとし、天然ゴムの配合比率や粒径などを変えて試験を繰り返した結果、界面の接着性が向上し、両



ほぼ100%植物由来のバイオプラスチックの「筆箱」



バイオプラスチックの自動車内装部品（写真提供：マツダ）

会社、近畿大学工学部などが参画した。「このプロジェクトでは環境負荷の少ない新素材の開発が中心課題となりました。そこで重視したのがカーボンニュートラルという考え方です。」こう語るのはプロジェクトに参画した近畿大学工学部の白石浩平教授である。

カーボンニュートラルとは、二酸化炭素を排出しても新たに増加させないという考え方である。そこで、プロジェクトでは可能な限り植物由来のポリ乳酸を使用し、しかも耐熱性や耐衝撃性などを高めることを目標とした。原料を加熱溶解し金型に詰め、その後冷却固化する射出成形では、長くても一分以内にはポリ乳酸が結晶化することが必要である。そのためには結晶化を促進する結晶核剤が不可欠となるが、それについては西川ゴム工業が新規に開発した、糖類を用いた結晶核剤で耐熱性と成形加工性を高めた。

一方、耐衝撃性では、硬くて衝撃にも強いという、相反する性質を共存させることが必要となった。一般的には、ポリ乳酸に軟質剤を添加して衝撃を緩和したのではあるが、

相の結合・一体化が進んだ。ポリ乳酸単体に比べて、耐衝撃性は十四倍に、耐熱温度は約五三 から二〇 以上向上したのである。

しかし、それでも厳密には植物由来約九九%で、100%ではない。生分解性という廃棄時のメリットは使用時にはデメリットとなる。水に浸けるとプラスチックの成分が分解してしまう性質は高温・多湿条件におかれると、プラスチックの性質を変えてしまうことがあるのだ。それでは自動車などの産業用途には使えない。そこで加水分解抑制剤をほんのわずかに配合しているのだが、その抑制剤が石油由来であるためだ。したがって、「ほぼ100%植物由来」というのが正確な表現となる。

ユーザーのニーズに こたえる開発

「このプロジェクトでは目標をほぼ達成できましたが、天然ゴムは産地によって品質が異なっていたり、光に弱いといった問題点もあります。それらを解決しながら「CT機の二丁ズ」にこたえるバイオプラスチックを開発していきたい」と、白石教授は今後の抱負を語った。

100%植物由来のバイオプラスチックへの挑戦は、成果を生み出しながら、実用化への道を着実に前進している。

「人を守る」を企業理念に 事業領域を拡大するハツタ山口

〈山口県周南市〉

高い専門性を生かして県内の各公設消防や周南コンビナート等の防災を担ってきたハツタ山口は、「人を守る」という使命を堅持しながら福祉にも事業領域を拡大し、福祉ニーズに対応した介護を提供している。

高い専門性でコンビナートの 防災を支える

山口県周南市に本社がある株式会社ハツタ山口の設立は一九六五（昭和四十）年で、消防防災施設の企画、設計、施工、メンテナンス会社としてスタートした。その時に着目したのが周南地区で相次いで建設されていたコンビナートだった。周南コンビナートは昭和三十年代後半から整備され、現在では化学産業などを支える日本の代表的なコンビナートに成長していった。

「昭和三十年代末からは安全を確保するために消防法の規制が厳しくなってきましたが、それに対応できる地元企業はありませんでした。そこで、すでに消防設備士の資格を取得していた当社に相談が寄せられるようになり、図面の作成から作業までの総合的な防災のお手伝いをするようになりました」。こう語るのは、ハツタ山口を創業した小田正

雄会長である。

小田会長は創業前には大阪のメーカーに勤めており、機械に強いことも生かして、積極的に「コンビナートの消防防災需要を取り込んでいった。それと同時に、消防関連規制の動向をいち早く把握し、それに対応できる資格や知識も積極的に取得していった。コンビナート側になれば、ハツタ山口に相談すれば新たな規制もクリアできるといったメリットもあったのだ。

そのために、ハツタ山口は常に先駆的に事業を展開するとともに、高度な防災システムを確立していった。その一例が一九六四（昭和三十九）年の新潟地震を契機に制定された石油コンビナート等災害防止法である。この法律により「コンビナートは高所放水車や大型化学車などの導入が義務付けられたが、いち早く対応したのがハツタ山口である。そのため「コンビナートでのシェアは県内では圧倒的に高くなっている。

福祉エンジニアで付加価値 を高める

二〇〇〇（平成十二）年にスタートした介護保険制度では、ケアマネジャーが介護を必要とする人のケアプランを作成し、必要となる福祉機器を介護の専門会社等からレンタルすることになっている。したがって、福祉機器の決定ではサービスの質が大きなポイントとなる。

「そこで重視しているのが福祉エンジニアの要素を高めるといことです。例えば、車いすの場合、メーカーの機器をそのまま納品するのではなく、使われる方にフィットするよう調整しています。ベッドでも使いながら離床させ、やがて自立できるようにマネジメントしています。当然高い技術力が必要ですが、それによって付加価値も高めるようにしています」と、小田社長。高齢者や障がい者が頼れる企業になることで、企業価値を向上させようとしているのである。

しかし、福祉エンジニアの要素を高めるためには、高齢者や障がい者が何を求めているかを知ることが大切だ。そこでハツタ山口では、社員が福祉の現場に行き、高齢者や障がい者を支える作業を経験している。直接触れ合うことで高齢者たちのニーズを肌で実感しているのだ。

「人を守る」の理念で 福祉にも事業を拡大

「コンビナート関連で事業基盤を構築するとともに、ハツタ山口が新しい事業の

ユニバーサルデザインの 消火器具も開発

二〇〇五（平成十七）年、ハツタ山口は新しい家庭用消火器具「CASSO（キャッソ）」を開発し、全国で販売している。これは、初期消火には役立つが、使い方や置き場所がなかなか分からないという家庭用消火器具のイメージを打ち破る消火器具だ。

「誰でも使いやすい」というユニバーサルデザインの発想を取り入れ、デザイナーとのコラボレーションで開発したものである。スプレー式で、ロックを押し外すと消火薬液が噴き出すため、片手でも操作できる。この製品こそ、消防設備と福祉の両分野で事業を展開するハツタ山口の強さが発揮されているといえる。

創業時から「人を守る」を理念に掲げるハツタ山口は、「現場」ではぐくまれる人材と、いち早くキャッチした情報で企業価値を高めながら、事業基盤を着実に強化している。



ユニバーサルデザインの発想を取り入れたCASSO（写真提供：ハツタ山口）



日本の化学産業を支える周南コンビナート（写真提供：フォト・オリジナル）



消火器と車いすのディスプレイが印象的なハツタ山口の本社

その結果、ハツタ山口は高齢者や障がい者から高い信頼を得ていった。

地域創生のリーダー育成を目指し 私塾を開いた松畑熙一さん

大学の学長を務めながら、私財を投じて「岡山の現代版松下村塾」ともいえる「連塾」を開設した松畑熙一さん。人と自然、人と歴史といった「連」を大切にしながら、産学官民一体となって「共に地域を創る」と奔走している。



profile

松畑熙一 まつはたけいち

1940年広島市生まれ。大学院を修了後、岡山大学教授、学部長、副学長を経て、現在は中国学園大学・中国短期大学学長。専門分野は英語教育学・国際理解教育学。著書に「英語は楽しく学ばせたい」、「吉備学への助走」などがある。

文：鈴木富美子（岡山市在住） 写真：林田 悟（岡山市在住）

キーワードは 「つながり＝連」

若葉の緑が晩春の風にそよぐ昼下がりのキャンパス。午後の講義の始まりを告げるチャイムが聞こえてくる学長室で、「地域創生」を熱く語る松畑熙一さん（69歳）には、もう一つの顔がある。二〇〇五（平成十七）年、長く勤めた大学を定年退官するにあたり、退職金などを投じて開いた私塾の塾長としての顔である。

「現代版松下村塾」とでもいえるだろうか。あらゆる年代、さまざまな職業、県内外各地域からの塾生に向けて、歴史・教育・文化・社会などの諸問題を、「つながり＝連」をキーワードに説く「連塾」。夢のある地域を創生する人材の育成を目指して地道に活動を続け、今年で開塾四周年を迎えた。

松畑さんは英語教育学を専門に、一九七九（昭和五十四）年から岡山大学で教壇に立つてきた。教育学部長、副学長を務め、定年退官を迎えるにあたって脳裏に去来したのは、「これからは社会・地域へ恩返しを」という思いだけでなく、地域での人づくりがほとんどなされていない現代社会への憂いだらした。

同時に、自分自身、長く英語を研究してきたことで視野が世界に広がってきたことには自信を持てたが、日本の歴史やオリジナリティー、いわば自らがよって立つ「土台」については揺るぎないものを持ってないでいた。

「世界的な視野が横糸とすれば、土台を追求するのは縦糸です。この横糸と縦糸をきちんと織りなすことで、私たちが立つ地域を織り上げていくことができる。そういう視点を持つ人材を養成すれば、地域を創生していくことができるのではと考えたのです」と、松畑さんは塾開設のきっかけを話す。

「再生」ではなく、ゼロから 共に創り上げる「創生」

「地域創生」。。「再生」ではなく「創生」とするところに松畑さんの思いが強く表れる。今活気を失っている地域の「再生」にとどまることなく、望ましい地域を新たにゼロから創り上げるイメージ。このイメージの原点には、高校時代に自宅が全焼し、灰以外何もないうちから家族と共に家や生活をつくり上げた実体験が重なる。

「ある意味、今の若者が気の毒に思えることもあります。ゼロを経験しようにも世の中が豊か過ぎます。だからこそ、ゼロから一緒に創り上げていこうとする意気込みが大切になってくるのです」

現在、学長を務める大学においても「地域創生学」というカリキュラムを設けたのははじめ、他大学や行政、民間と連携し、「教育支援人材育成事業」を展開してきた。地域の人材を共に育て、育ち合う環境をつくるため、いわば「上から目線」の地域貢献・還元ではなく、お互いに連携・協働・融合しようとして、大学内外に向けて提唱してきた。

「こうした大学活動でも共通するのは、共に地域を創っていく」という理念である。その地域とは、今や日本から失われつつある人と人とのつながりをはじめ、人と自然、人と歴史、人と生命とのつながりである。それらの新しいつながり（連）をつつていかなければという思いなのだ。

活動が広がりNPO法人化

こうして開塾した「連塾」は、岡山市北区京山の借地に建てた百三十坪、六十人収容のセミナーハウスで、十代から六十代まで一期生五十一人を迎えてスタートした。二〇〇五年四月のことだ。現在も、主婦、会社員、医師、公務員など職種も地域も多彩な塾生らがこぞ学ぶ。



60人が収容できる「連塾」のセミナーハウス

原則的に毎月一回開催されるセミナーでは、まず塾長である松畑さんが社会のさまざまな問題や地域活性化に向けた具体的方策を講義した後、塾生との質疑応答、議論などで内容を深める。またテーマによっては外部講師を招いて話を聴くこともある。

テーマは多様だ。例えば、食の問題なら「食品」という「もの」として「食」をとらえずに、「食は命」であるとする視点を重視する。また環境がテーマなら、「環境そのもの」「人について語るのではなく、環境について、人間がどうあるべきか」を語り合う。いわば根源的な課題に深く迫っているのが大きな特徴だ。

テーマの深まりを受けて、開塾二年目からは、「健康とは何か? 健康とは生き方、ライフスタイルである」という視点から、「連塾」の姉妹塾「健塾」を新たにスタートさせた。これは五十代以上を対象に「福寿社会」のリーダーを養成しようというものだ。

こうして、連塾と健塾、さらには大学や財界関係者らによる「地域創生学研究所」も併設して、二〇〇七(平成十九)年にはNPO法人化した。見識を深めるため、机上の議論だけでなく、桃太郎にちなんだ焼肉やキジ団子など地元食材による「桃太郎鍋」、すべての人が楽しくできる健康体操「吉備キジ桃太郎体操」、江戸時代の旧山陽道に親しむ「歩こう・連こう・旧山陽道」ウォークなど、実に多様でユニークな活動を展開している。同年に岡山で開かれた「第十九回全国生涯学習フェスティバルまなびピア岡山」で「岡山発学びスタイル」として全国発信したというのも、その一例だ。

塾生の質的变化と「吉備学会」の発足

こうした活動の成果として、「塾生は四年で予想以上に質的に変化した」と松畑さんは胸を張る。

六十代の一主婦が「夏休み宿題お

助けマン」と称して子育て支援活動を手掛け、今や町内会から地域全体を巻き込む活動に発展させた例、市や県で議員として地域の政治を志すようになった例など、枚挙にいとまがない。しかし、松畑さんは強調する。

「決して政治家を育てようというのではありません。教育全般にいえることですが、人づくりは結局自分づくりです。『一人が変われば社会は変わる』を合言葉に『世直し隊』となる人材を多く輩出していこうという活動が、結果として塾生自らの変革を促したのです」

このような進化を経て、松畑さんは今後新たに地域創生学としての「吉備学」を確立しようとして奔走している。自らが生まれ育った広島県の備後地域も含め、岡山の備前・備中地域を合



年代などを越えて一緒に議論する塾生たち

わせて幅広いフィールドを舞台・研究対象とする「吉備学」である。

活力ある人づくり、まちづくりを目指す二〇〇六(平成十八)年度からスタートした岡山県内十六大学の連携組織「大学コンソーシアム岡山」と協働しながら、連塾も加わり産学官民が一体となって、総合学としての「吉備学」を打ち立てるべく、「吉備学会」も二〇〇七年三月に発足した。

若さとは夢への突進力、生ある限り自己変革を

「人づくりといったら、人が人を育てることは基本的にはできません。究極的に教育とは『共育』、つまり共に育つことであって『自育』なんです。自己変革し続けなければ成長はない。死ぬまでずっと勉強し続け、柔軟に変わっていくなくては」

平日は大学、週末は連塾と、ほとんど休みなく活動する松畑さんは、「生」という上り坂を、頂点に向かって毎日一歩ずつ登り詰めていくような気持ちでいるという。「若さとは夢への突進力だ」と断言し、地域創生リーダー育成に向け人生哲学の糧として「論語」ならぬ「連語」をいずればまとめたいと朗らかに話す「教育人」は、まさに飽くなき「夢紡人」のように見えた。



議論をリードする松畑塾長の姿からは未来に向けた熱意が伝わってくる。

鈴木富美子 すずき・ふみこ

1964年岡山市生まれ。大学院修了後、高校教師、出版社勤務などを経て、現在はフリーライター。福祉、環境、教育など幅広いテーマで取材・執筆活動を続けている。

佳味彩々

II どんとろけ飯

〈鳥取県東・中部〉

鳥取県東・中部地域では、豆腐を食材とした素朴な「郷の味」が多彩である。「どんとろけ飯」という一風変わった名前の炊き込み飯もその一例だ。

豆腐を油でいためる時の「パチパチ」という音が雷鳴に似ていることから、方言の「どんとろけ」にちなんで名がつけられたと伝えられている。明治初期から農作業の節目や集落の集まりなどに作られていた伝統料理だが、今日では学校給食にのぼるほど普及している。

「祖母から教わった時は豆腐からしらえまきで炊いていましたが、今では豆腐は市販のもので、炊くのも炊飯器です。魚や肉が手に入りやすい土地では大豆は貴重なタンパク源でしたから、重宝されて伝えられてきたんでしょう」と、鳥取県食生活改善推進委員を長く務めた中嶋富美代さん(83歳)は語る。

東部から中部にかけての山村で普及したように、「寒い時期だけの限定料理だった」と中嶋さんはいう。「豆腐は梅雨から夏場にかけては足が早かったためのようだ。

調理法やレシピは地域や時代とともに

異なったり工夫が凝らされているが、中嶋さんたちが住む気高町(現・鳥取市)で行われている調理法を紹介しよう。

米は炊き始める三十分前に洗って、ザルにあげておく。「ホウ」は皮をささがきにして、水にさらしてアク抜きをする。油揚げ、ニンジン、干しシイタケ、ちくわをこまかく刻む。

同じく三十分前に水切りしてほぐし、湯で煮た豆腐を油でいため、薄口しょうゆに酒、砂糖、塩などで味付けしておく。湯で煮るのは、いためた時に弾力が出て崩れなくするためである。

炊飯器に米を入れ、さきほどの調味料とだし汁を入れて炊く。炊き上がったご飯と混ぜ合わせ、最後に刻んだネギを散らして盛り付ける。主婦の知恵がつまつた逸品である。

元来は炊き込みご飯であるが、「炊飯器が普及した昭和半ばから、今のようにな混ぜご飯になってきました。伝統料理といえども、工夫して若い人に伝えていければいいですね。栄養価も高いですのうで」。こう語る中嶋さんは機会があることに普及に努めている。

文：中山昇治(鳥取市在住) 写真：井上耕ノ介(鳥取市在住)





藩ものがたり

1

津和野藩

《島根県津和野町》

中国山地に囲まれた津和野藩は、厳しい藩財政の中でも藩校を創設するなど、人材の育成に力を注いできた。そこからは西周や森鷗外といった近代日本を代表する人材が生まれている。

坂崎出羽守と千姫騒動

津和野の町の中心部は近世津和野藩の城下町であり、「山陰の小京都」と呼ばれ観光客に人気のあるところである。中世には鎌倉時代以来の地頭職であった吉見氏が津和野城を築いて勢力を伸ばし、戦国期には毛利氏の武将として活躍したが、関ヶ原の敗戦により吉見氏は萩に退転。その後、津和野に入ったのが坂崎直盛である。坂崎出羽守といったほうが分かりやすいであろう。千姫騒動で有名な人物である。

直盛はもともと宇喜多氏の一族であり、本来は西軍に近い立場だったのだが、関ヶ原の戦いでは東軍に加わり、その功により津和野三万石を得た。直盛は津和野城の大改築を行うなど、近世のまちづくりの基礎を築いた。直盛は家を滅ぼした人物だけに悪評も少なくないが、その都市計画はかなりすぐれていたと評価されている。ちなみに、一般には直盛が反逆に及ん

津和野藩の経済政策

坂崎氏の改易の後、鹿野（現・鳥取市鹿野町）から亀井政矩が四万三千石で移って津和野城主となった。政矩は入城後、山城である津和野城の地理の悪さを考え、日本海を望む高津（現・益田市）に新城の築城を計画したが、その折も折、広島藩の福島正則が幕府に無断で城を改修したために改易となる事件が起き、その影響で新城築城計画は断



朝霧に包まれた津和野城址

念せざるを得なくなつた。

政矩は福島正則の城地接收に際して病をおして広島に出向き、さらに幕命によつて伏見へ向かつたが、その途上の落馬が原因でわずか三十歳にして没した。二代藩主茲政は幼少であり、それもあつて御家騒動が起つたが、重臣・多胡真清の主導のもとで内紛を解決した。

真清の子の三人兄弟真益・真武・真蔭は、藩政初期の産業振興に大きな手腕をふるつた。特に真益は紙業発展に大いに貢献し、後に紙は藩の専売となり、藩財政の重要な財源となった。石見半紙は現在でも津和野の名産品となつている。太宰春台はその書『経済録』において、津和野藩の産業開発の成功を激賞している。

藩校養老館と人材の輩出

津和野藩の藩校である養老館が創設されたのは、天明六（一七八六）年、八代藩主矩賢の時である。前藩主矩貞の時代にも藩校創設が試みられたが、度重なる災害による出費などが続いて果たせなかつた。矩賢の時代にも財政に余裕が生まれたのでは決してない。むしろ天明の飢饉により三十七万両の借財を抱える中で創設であつた。政治の中心に人材育成を置き、特に医学の進歩を

重要視して「医学生貸費制度」を発足させたりもした。

養老館は多くの人材を輩出し、幕末から明治・大正期にかけて日本に大きな影響を及ぼすこととなるのだが、その大きな要因となつたのは第十一代、最後の藩主である亀井茲監の教学改革である。茲監は文武両道に秀でた俊才であつた。時代は諸外国の船舶が頻々と来航し、開国を迫るなど、多事多難を極めていた幕末である。

茲監はこつした中、藩内の人材を身分に関係なく各地に遊学させ、中央の先進的学術を修めさせる一方、藩校自体を改革し中心教学を国学とした。しかし、単に復古主義的で排他的な視野の狭い国学ではなく、洋学も積極的に受容するなど、新しい時代を見通したものであつた。

津和野藩が生んだ人材のうち、もっとも知られているのは西周と森鷗外である。周は藩医の家に生まれ、本来ならば家業を継ぐはずであつたが、茲監の命によつて勉学修行に転ずることとなつた。しかし、ペリーの浦賀来航の際に派遣された江戸で、洋学に精進することの必要性を実感し、ついに脱藩。後に幕府留学生としてオランダに渡つた。帰国後は「万国公法」を訳出し刊行するなど明治文

化の先駆者として活躍した。

一方、森鷗外は明治二（一八六九）年閉館となる二年前に養老館に入館。鷗外もまた藩医の家の生まれであり、周とは親せき筋であつた。陸軍省医務局長などの要職を務めたかわり、作家としても活躍したのはあまりにも有名である。

二人が二人とも藩医の家に生まれたことは、津和野藩が医学を重要視していたことと併せ考えると、興味深いところである。

鷗外の墓は町内の永明寺にあるが、遺言により、ごく質素なものになつている。なお、同じ寺内には坂崎直盛の墓所もある。幕府の不興を買うのを恐れたのか、その銘は「坂崎出羽守」となつている。



多くの人材を輩出した養老館



森鷗外も眠る永明寺

監修：矢富巖夫（郷土史家・島根県益田市在住） 写真：高野淳（津和野町在住）

小川氏庭園

《島根県江津市》

小川氏庭園は江津市にある個人庭園である。石見地方の豪族であった小川氏は古くから海岸地帯を領有していた。大和国吉野郡小川村の出身で、後鳥羽院の愛顧を受けていたことから、院が遷幸になったおり隠岐まで随行し、その後、子孫がこの地に定着したという。開墾、水運、漁業に尽力して勢力を得、和木將軍とも呼ばれていた。

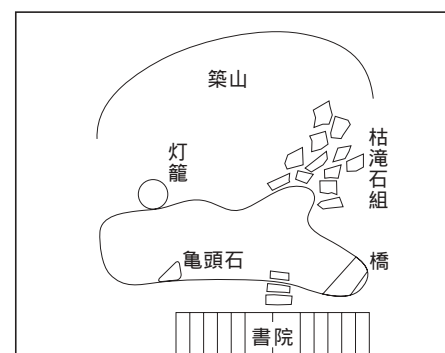
不明である。画聖雪舟等楊が、石見益田城主に招かれて石見に入った頃の作とも、小川家に小川雪舟という人がいてその人の作ともいわれるが、いずれも定かではない。雪舟等楊説は、画聖雪舟が益田の医光寺や萬福寺などを放浪していた頃に小川家にも立ち寄ったとされていることから関係づけられたようだ。雪舟は数年間小川家に寄宿し、室町時代初期の庭に手を加え、現在の書院庭を完成させた

というのが小川家に伝わるいわれである。本庭は約百十坪の池泉観賞式庭園である。前面南北に細長い池を作り、東部の山すそを利用した築山に豪快かつ品格のある枯滝石組が組んである。上部に三尊手法で組まれた石組は本庭の一番の見どころであり、最も古いとされる部分である。その下には山から誘導された水を落とす、もう一段の滝が組まれている。このように上部に枯滝石組、下部に水落の滝石組を作る二段式の手法は、

室町時代の古式な滝組の特徴でもある。一方で、西部の書院のある部分には大きく手が入って、池庭が埋め立てられるなど地割に変更が見られる。しかしながら、総じて個人所有の庭園で江戸時代の元禄をさかのぼるものはほとんどなく、その意味でも小川氏庭園や鳥取県米子市の深田氏庭園(「碧い風」60号参照)などは、そのままの姿を残した庭園として今日貴重な存在となっている。



上部に枯滝石組、下部に水落の滝石組を配した庭



配置図



庭園を鑑賞できる書院



書院から眺める灯籠(とうろう)と龍頭石



力強さが伝わってくる枯滝石組



白い基壇の上にある本殿(側面)



優美な千鳥破風

国宝の旅

1

吉備津神社本殿・拝殿

《岡山市》

岡山市と倉敷市のほぼ中間にある小高い山のふもとに鎮座しているのが吉備津神社である。本殿と拝殿は室町時代初期の代表的な建築物で、神社建築では日本屈指の巨大さ（けた行約十五メートル、はり間約十八メートル、棟高約十二メートル）を誇る。檜皮の大屋根に千鳥破風を前後に二つ並べるといふ大胆な構造で、優美・軽快な印象を与えている。全国で唯一の様式であるため、単に「吉備津造り」とも言われる。



「碧い風」VOL.66 2009年7月1日発行

発行人・岸本勝美 編集人・城市 創
企画・発行・中国電力株式会社 エネルギア総合研究所
〒739-0046 東広島市鏡山3-9-1 ☎082(420)0700
[ホームページアドレス] <http://www.energia.co.jp/eneso/tech/index.html>

編集・制作・有限会社城市創事務所
〒102-0073 千代田区九段北1-9-5-1003 ☎03(3234)4656

ISSN 0918-9335

禁・無断転載